

「朗読を楽しむ in 静間」 二あいさつ

お忙しいなか、ご来場くださり、誠にありがとうございます。

劇研「空」は平成12年に誕生しました。

当初から目標の一つにしてきたことは、

「地域の歴史・文化の掘り起しと再創造」です。

そのために、地域を素材にした創作劇を、多くの方々の協力で上演してきました。

朗読では、「日本の名作・古典」や

「地域の作品」を取り上げてきました。

今回は、地元静間出身の小林俊二さん、中島雷太郎・三ツ子夫妻の作品も紹介します。また万葉集の中から人麻呂の和歌、詩集『春の残像』から現代詩、創作「長州軍侵攻と銀山最後の代官」を群読します。

言葉は本来、声で伝え、声で聞くものです。活字が発達した現在、朗読の機会は少なくなりましたが、目ではなく、声で聴く面白さや感動を味わっていただければと思います。

午後のひととき、どうぞ気楽に朗読をお楽しみください。

(劇研「空」代表 洲浜昌三)



1 小林俊二詩集『土と石の思想』より

小林さんは1939年大田市静間町八日市生まれ。旧姓は宮脇。国学院大学卒、都立大大学院修了。郷土史家として論文や郷土史など多数の著作の外に小説や随筆、二冊の詩集もあります。仁摩町大國在住、平成29年逝去。詩集から4篇朗読します。

- 「小林俊二さんを偲んで」(島根年刊詩集) 朗読―山本和之
- 「心にゆれる記憶がある」 朗読―澤江洋子
- 「ある木造の図書館」 朗読―田中和子
- 「あなたたちにこのそらをあげよう」 朗読―吉川礼子
- 「おん母よ」 朗読―松本領太

2 柿本人麿 万葉集より 石見の歌

人麿が石見から離れるときにうたったといわれる和歌と、現地の妻だったという依羅娘子の和歌、三瓶の浮布の池をうたったといわれる和歌を紹介します。朗読だけでは味気ないので、音楽劇「琴の鳴る浜」で歌われた曲(長坂行博作曲)に乗せて何首か披露します。

「石見の国より妻に別れて上り来し時の歌」朗読ー澤江洋子
「反歌二首・妻の依羅娘子の作る」歌ー吉川礼子
「浮き布の池とも思える歌四首」紹介ー吉川・田中

3 中島雷太郎・ミヨ子歌集『径づれ』より

中島雷太郎さんは明治45年静間生まれ、大正15年八束銀行（後の松江銀行ー山陰合銀）勤務。昭和5年12月文芸雑誌『静慮』創刊。中島資喜も編集同人になる。同人も増え昭和7年5月『山陰詩脈』と改題。県内の有名な歌人なども寄稿し、通算49集まで発行した。昭和10年『磯松』を発行。昭和8年結婚。残念ながらこの貴重な雑誌は、どこを探しても一冊も見つからない。

ミヨ子さんは大正3年鹿島町上講武生まれ。昭和15年当時の満州奉天へ。建設会社田原組で働く。敗戦でシベリアへ3年半抑留。零下40度の大地で辛酸をなめる。奉天で三女が死亡、長男、次女、四女の3人の子を連れて引き揚げ。帰国後、相次いで長男、4女死亡。戦争の苦しみを味う。

帰国後、雷太郎さんは、大田信用組合（後に島根信用金庫）に勤務、昭和47年退職。夫婦ともに短歌や詩などで活躍。平成2年、短歌、詩、自分史を載せた『径づれ』を発行。

山陰中央新報から続『人物まね文学館』が発刊されたとき、石見の詩の歴史を調べていた洲浜が偶然大阪在住のミヨ子からメールを受け、雑誌のコピーを送

ってもらったことから、今回の朗読が実現した。

「『径づれ』に出会うまでの不思議な縁」話ー洲浜昌三
自分史より「シベリア抑留」「敗戦」朗読ー松本・田中・他
中島雷太郎詩「磯松」朗読ー山本和之
中島ミヨ子詩「ハゼの並木」朗読ー松本領太
短歌紹介 話・朗詠ー洲浜昌三

シベリア抑留 中島雷太郎

奥けど押せど極は動かずアムールの氷上に捕虜のわれら声なし

奉天にて 中島ミヨ子

銃剣もつソ連兵来て靴のまま畳に突立つ母子の部屋に

二人の子

飢えに耐え病に耐えて生命の灯 暫し灯しぬ四才と二才

十年経て尚癒えやらぬ創跡は 一人堪えつつ生くべきものぞ

4. 洲浜昌三詩集『春の残像』より

平成30年12月、コールサック社から出版。これまでに『キャンパスの木陰へ』『ひばりよ 大地で休め』などの詩集があり、この度は40年ぶりの詩集。「端的な表現で心に響く詩」を書きたいという作者の詩は、分かりやすくストーリー性

があり、朗読にも適しているとも言えます。この詩集には、教え子などの回想、石見銀山、ふるさと石見、家族、子供たちのことを書いた44篇の詩とエッセイで構成されています。この詩集は昨年9月、第19回中四国詩人賞を受賞。日本詩人クラブ会員、中四国詩人会理事、県詩人連合理事長、「石見詩人」同人、日本劇作家協会所属。

詩「父がくれた腕時計」

朗読 | 澤江洋子

詩「石見銀山 五百羅漢」

朗読 | 山本和之

詩「またくるけお母さん」

朗読 | 洲浜昌三

江戸から明治へ

5 群読劇『長州軍侵攻と石見銀山最後の代官』

| 鍋田三郎右衛門 | 作・洲浜昌三

徳川幕府は、長州を征伐するため2回にわたって兵を送って攻めますが、連戦連敗します。幕府は、松江藩、浜田藩、紀州藩、福山藩に出兵を命じます。長州藩は、1866（慶応2）年6月16日益田を占領。続いて三隅、浜田へ侵攻します。さて、浜田の城主はどうしたでしょう。何千人の武士や家族は？浜田城は？そして、大森銀山の代官は？怖くなって逃げた？百人余の武士たちはどうしたの？。

いろいろな歴史書や作家・司馬遼太郎氏の『花神』、石村勝郎氏の著作、

等々も引用しながら、群読劇として発表します。

朗読 | 吉川礼子 田中和子 松本領太 山本和之 洲浜昌三

映像 | 松本領太

作品介绍（朗読作品の一部を紹介します）

心にゆれる記憶がある 『小林俊二詩集』より

小林 俊^{としじ} 二

(一)

四十年の月日をおいて
心にゆれる記憶がある

風がひゅうひゅう鳴っていた

枯れ草と黒土と

麦の青芽の野面に

雪がわずかにこぼれていた

その日

おまえは養女にもらわれていった

三才の背を真直に立って

かんざしをゆらゆらさせながら

わたしに一度だけの晴着を見せながら

雪駄 足袋ばき

親類のおばさんにつれられて
ちよこちよこと歩いていった

おまえに別離の悲しみはなかったが
自然に還元していた母を想うとき
私の心にゆれる記憶は今も悲しい

(二)

長く白く続く晴の道に
白南風しらほえはほこりをあげた

母は動かぬ身体をゆるゆる運んだ
よちよち歩きのお前は二、三步前を歩き
それからちらつとふりかえり
あどけない笑いを母にふりまいた

だからであろうか
母の死の病床で

お前は遺言というものを聞いたという
不治と呼ばれた結核の
はげしい息のあえぎから
きれぎれな言葉さだめが守られて
お前は養女の運命さだめをもつただろう

母は間もなく目を閉じた

葬式の花輪の影で

母は何かを笑っているようだった

華やかな読経のなかで

嗚咽おえつする姉たちの綿ぼうしはゆれていた

深く四角な黄泉よみの国に

あなたの冷たい棺を置いて

私は土くれの二つ三つを

柿本朝臣人麿 石見の国より妻に別れて

上り来し時の歌二首併せて短歌

石見海み 角つのの浦廻うらみを 浦なしと人こそ見らぬ

瀉なしと人こそ見らぬ よしゑやし 浦はなくとも
よしゑやし 瀉はなくとも 鯨魚いさな取り 海辺を指して
和多津きたつの荒磯ありその上にか青なる 玉藻沖つ藻

朝羽あさは振る 風こそ寄らぬ 夕羽振る 波こそ来寄れ

波の共むたか寄りかく寄る

玉藻なす 寄り寝し妹いもを 露霜の置きてし来れば
この道の 八十隈やそくまごとに 万よろづたびかへり見すれど

いや遠に 里は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ

夏草の思しなひ萎しなえて 慰しのふらむ 妹が門見かどむ

靡なひけこの山

反歌二首

石見のや高角山の木の向より 吾が振る袖と妹見つらむか

笹の葉はみ山もさやにさやげども 吾は妹思ふ別れ来ぬれば

本朝臣人麻呂の死に時、妻の依羅娘子の作る歌二首

今日今日と我が待つ君は石川の 峽かひに交りてありといはずやも

直ただの逢ひは逢ひかつましじ石川に 雲立ち渡れ見つつ思ひむ

『柿本朝臣人麻呂之歌集』より

三瓶山、浮き布の池とも思える歌四種

大おおなむち 汝すくなみかみ 少御神いもせの作らしし 妹背いもせの山を見らくし良しも

少御神と大汝二つの神がお作りになった背(せ)の山妹(いも)

の山見ているだけですばらしい※「大汝」大国主命の異名のひとつ。

※「少御神」少彦名ともいう。大国主命と力を合わせて国土経営にあ
たったとされる。

※「妹背の山」和歌山県伊都郡かつらぎ町、紀の川の北岸に背の山、

南岸に妹の山が向き合うように並んでいる。三瓶山との説もある。

(洲浜)

我わが妹子もこと見つしのはむ沖つ藻の 花咲きたらば我に告げこそ

いとしい妻に見立てては懐かしもうと思うから沖の藻花を咲かせたら私

に知らせてくれないか

※「我妹子」へわぎもへ 男性が妻や恋人など親しい女性をいう語。

※「しのはむ」へしのはむへ 恋い慕う。懐かしむ。へむへ 意志。

※「告げこそ」へ告げへへこそへ 願望。知らせてほしい。

君がため浮沼の池の菱摘むと 我が染めし袖濡れにけるかも

あなたのために泥深い池で菱の実摘んでいて私の染めたこの袖が濡れて
しまったことでした

※「浮沼」泥深い沼。三瓶の浮き布池という説もある(洲浜)

※「菱」水生の一年草。種子は食用になる。

妹がため菅すがの実摘みに行きし我 山路に迷ひこの日暮しつ

妻のために菅の実を摘みに行ったわたくしはこの日一日山道で迷
って過ごしたことです。

※「菅」カヤツリグサ科のスゲ属の植物。一説に、ユリ科のランともい
う。以上の四首は柿本朝臣人麻呂の歌集に出ている。

磯松

(昭和7年作 詩集『磯松』より)

中島雷太郎 注・一部現代カナ使いに改めています

磯松を じつと見つめていると

涙がこぼれそうになる

みじめにゆがめられた幹はどうだ

むざんにも枝を奪われた姿は ー

磯松 宿命と言えば顔をそむけ嘲笑うか

砂浜にみじめさを食っていても

こいつ卑屈へいくつに生きていない

しっかりと抱きしめてやれ

ぴったり頬をすりつけてやれ

無言のこいつ磯松は胸中を悲憤たぎで滾たぎらせている

はたはた 海風に鳴っている磯松

真裸の磯松

こいつ傲慢な海に鋭い意志を燃やしている

父がくれた腕時計 詩集『春の残像』より

洲浜昌三

「進学したけりや自分の力で自由に行つてくれ」

六人の子どもがいて 五反百姓の大工では

自由が 子どもへの最大の遺産だったのだろう

それでも大学に合格すると入学金を工面し

お祝いに腕時計を買つてくれた

村ではまだ腕時計は珍しい時代だった

新宿が見えるバラック建ての部屋で自炊し

金がないときは一週間も米に醤油を掛けて食べ

口がカラカラになつたこともあつた

ある時は十円玉を求めて畳の間まで捜した

飯田橋駅から小岩まで四十円

そこに行けばやさしい義姉あねがいる

初めて質屋へ行き 腕時計を見せた

「五百円貸してください」

「駄目です」

即座に返事が返つてきた

一気に決着をつけようと大幅に譲歩する

「百円」

「この時計ではねえ」

「・・・四十円」

と言おうとしたら

何かが言葉をさえぎり

無言で店を出た

後に母に話したら 母が言った

「東京じゃ時計があるだろういうて

広島まで行つて質屋で買ひんさつたんよ

入学金は大工賃の前借り 半年分のね」

劇研「空」は平成12年6月、大田市で声を上げた演劇サークルです。大田高、邇摩高、川本高の演劇部出身者を中心に発足しました。日頃の活動に参加できるメンバーを核にして、可能な人たちに呼びかけて公演活動を行います。人数不足の上、体制も不完全、常に解体の危機を抱えています。町に演劇発表の拠点がある喜び、そこから生まれる可能性」を消さないよう、身の丈に合った活動を考えています。

「感動のある舞台の創造」、「地域の歴史・文化の掘り起こしと再創造」、「独自性と普遍性の追求」が目標です。高校演劇も応援します。民話などの作品化、朗読や劇の脚本作りにも挑戦します。現在は、月に2回、市民会館カルチャー講座「朗読で楽しむ郷土の作品」を中心に活動しています。令和2年度は、自分が紹介したものを持参して朗読することになっています。

劇や、朗読など発表が決まれば、それを目標に練習します。(劇研「空」)